

【成果のまとめ】

H23年度

H23年度は、表現と鑑賞の分野において、観賞学習を重点に研究を実践した。地域に資する書道教材を有効に活用する点、美術館での鑑賞学習・連携授業等を生かしながら生徒の思考力・判断力・表現力の向上を目的に実践し研究を行った。以下が成果と課題である。

【成果】

- ① 学習指導要領でも求められている中学校国語科書写との円滑な繋がりを意識し、「文房四宝」の単元を導入し体験型の授業を通して、生徒に興味・関心を与えられた。
- ② 鑑賞学習の充実を目指し、地域に資する書道作品(名品)や美術館での書作品の鑑賞を通して、表現力の育成に効果を見出した。
- ③ 生徒達の制作した書作品を貼りだし、相互の鑑賞学習を通して批評・工夫・改善箇所等を伝え合い、互いの良さを発見する機会を設けたことが、言語活動の充実に繋がった。
- ④ 国語科とのクロスカリキュラムを実践するべく、協力を依頼した。特に「言葉」の選定に力を借り、素材に対し、自ら思考し判断し自己の意図に基づいた作品制作への意識を導きだせた。

【課題】

- ① 本校で研究する要点が拡散してしまい、身に付けたい項目を絞り切ることができず、系統立てた授業展開に課題を要した。
- ② 生徒が、自ら自己の意図を意識して思考し、判断し、情報を獲得する力を身に付ける取組がより必要であった。
- ③ 言語活動の充実を目指す中で、生徒との対話設定を多く設け鑑賞の場をより多く与える機会が少なかった。
- ④ 国語科とのクロスカリキュラムについて、国語科の負担も考えられるので連携(教科横断型)を生かす方向で検討することに至った。

H24年度

H24年度は、昨年の課題を改善し、より明確に目的を絞り研究に臨んだ。特に表現力の育成に重点を置き、生徒の思考力・判断力・表現力の育成について再度研究を深めるにいたった。また、観点別評価の具体を明確に設定し、生徒の到達度合いや、つまずきの場を再確認し指導の工夫・改善に至った。昨年からの美術館連携は今年度も実施し、学芸員との連携授業を導入することで生徒の興味・関心に一定の効果を求め展開した。国語科との関わりは、連携授業(教科横断型)を取り入れ、昨年と同様「言葉」の選定、言葉の深まり、自ら作成したキャッチフレーズに責任を持つ目的を共通の指導項目とし書作する為の素材(言葉)に対する深まりに国語科の力を借りることで表現力の向上と育成に努めた。

【成果】

- ① 生徒の思考力・判断力・表現力の向上を目指し、系統だて指導を展開した。特に、ワークシートの充実をはかり、書表現の諸要素を段階的に取り入れ目的を明確に絞った。
- ② 表現力の育成については、相互評価や鑑賞学習を取り入れ対話を中心し、生徒の意図を明確に導きだし、指導の工夫・改善に生かすことができた。
- ③ 国語科との連携(教科横断型)を生かし、「言葉」の深まり、自ら作成したキャッチフレーズに責任を持たせるなど、「言葉」による素材選定について国語科の力を借りることで効果的な指導を実践することに繋がった。
- ④ 漢字仮名交じりの書における、興味・関心の向上を目指し名筆の鑑賞をより重視した。また国語科との連携を生かし、文学者が書き遺した漢字仮名交じりの書を紹介することで、言葉と書表現の諸要素との関わりを考える機会を持たせることもできた。

【課題】

- ① 漢字仮名交じりの書の作品制作において、漢字の書・仮名の書で学習した書表現の諸要素を中心に、段階的に取り入れ自己の表現意図や作風に変化を生じさせるまでには至らなかった。
- ② 生徒が思考し、自己の意図に基づくよう目的を明確にしたが、一度表現した試書から完成作品に至るまで、書表現の諸要素を生かした表現を大きく変化させるには新しい手立てが必要であった。
- ③ 国語科の力を借り、「言葉」についての深まりを意識したキャッチフレーズづくりではあったが、語彙力の問題が否めない。
- ④ 生徒が思考し、判断し、主体的に取り組む様子は、昨年と違い改善されてきたが自ら課題を見出し、工夫・改善していくきっかけづくりに教師からのアプローチや手立てがより必要だと認識した。

【課題における方策】

- ①・② 草稿段階において、鉛筆を活用しての草稿づくりを通して、事前に数種類の草稿を自己の意図に基づいて作成させることで表現領域に幅を持たせることで改善していきたい。
- ③ 国語科だけに「語彙力」を求めるのではなく、書道科としても鑑賞学習を通して、語彙力の育成を含めた言語活動の充実により、重点を置いた指導の在り方を研究していきたい。特に、相互鑑賞での発表前に自己の発表内容を整理し、適切な言葉表現であったか再確認する場を設定し、思いつきの言葉ではなく、自己の言葉に対し、より責任ある態度で臨ませていきたい。
- ④ 自己の課題を、文章に整理させそれをどの様にしていきたいのかを明確にし、再度確認していくことが必要であると感じている。特に、自己の意図がどの様に変化し、変化したことで効果を生み出したのかを相互鑑賞の場で確認・改善を行い、教師からの助言を取り入れ思考する場の環境づくりを行っていきたい。

今後の実践について

本校が2カ年に渡って取組んできた研究は、新学習指導要領で求められている指導の具体化を目指して研究に努めて参りました。本校の研究が、全国の書道教育の指導に際し、少しでも参考に値する内容であればと思っております。

新学習指導要領では、漢字の書・仮名の書・漢字仮名交じりの書の3分野について、指導が求められております。その中でも漢字仮名交じりの書の学習は、漢字の書・仮名の書の充実した学習が基礎基本となり、土台になってくる分野であろうと思います。生徒の身近な言葉等、現代の言葉を扱い、感動や感情を想像でき膨らませることのできる非常に奥深い単元であると感じております。

書道は文字を基にし、言葉を墨、筆、紙を扱うことで自分の心情を表現することのできる芸術であります。また文字の造形美や鍛練からなる線質の妙など、書表現の諸要素を活用し、生徒それぞれが自らの個性を表現できる漢字仮名交じりの書は、生徒が書道に対し意欲的・主体的に取り組む、自己の意図に基づき、思考力・判断力・表現力等を身に付ける上でこの上ない単元であると確信しています。今後は、国語科との連携(教科横断型)を生かし教科の持っている特性を発揮しつつ、相互の共通理解のもと指導計画を行い実践していきたいと思っております。

末尾になりましたが、視察研修として、授業を公開して下さった高校をはじめ、大学からの助言等多大なご協力を頂き、深く感謝申し上げます。今後とも、本校の書道教育の発展のため、御指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。2カ年の研究報告とさせていただきます。

北海道松前高等学校 芸術科 書道教諭 天満谷 貴之 西川 竜矢